



学童保育 さらなる充実を 指導員学校・合宿研修会

岩手県学童保育連絡協議会は8月26、27の両日第51回指導員学校・第33回合宿研修会を大船渡市と陸前高田市で開催しました。岩手県内の学童保育の保護者、指導員ら227人が参加、1日目に分科会、2日目に全体会と講演を行いました。同研修会はコロナ禍での中止、オンライン開催を経て、4年ぶりに対面開催となりました。

1日目は陸前高田市の高田コミュニティホールで4分科会、大船渡市のおおふなぽーとで3分科会を開催。このうち、おおふなぽーとで行われた「学童保育の法人化を考える」の分科会には36人が参加。すでに法人化している盛岡市、北上市、陸前高田市の3クラブが事例発表を行いました。そのうち、今年4月から市内6クラブが合同で法人化した、陸前高田市学童保育協会の（阿部勝）理事長は「合同運営で事務を一本化し、保護者の負担軽減や学童保育の安定運営、指導員の労働条件改善を目指した」と法人化の目的について説明。法人化するまでの議論の内容やスケジュール、事務作業についても解説し、「法人化して5か月がたったが、法人化して終わりではない。保護者会の活性化や、労働条件改善のための財源確保など、新たな課題もある」と報告しました。その後、参加者からは「法人化して良かった点は何か」、「法人化を目指す上で誰が中心となって進めるのか」、「会員の範囲はどのように決めたか」などの質問が出されました。3人の発表者はそれぞれの学童の事例や反省点なども挙げながら、質問に回答し、参加者は熱心に聞き入っていました。

2日目は大船渡プラザホテルで全体会が行われました。主催者として、県連協の阿部勝会長が「リモートでの会合が4年も続いたことでのマイナスの影響は、皆さんも感じていると思う。学童保育を充実させる運動にとって、直接顔を合わせ、学び交流することは不可欠だと確信している。この研修会での学びを受け、学童保育が、さらに充実するよう、がんばっていきましょう」とあいさつ。全国連協の佐藤愛子事務局次長が特別報告を行い「一人ひとりの保護者の声は小さく、時には異なる意見が出る時もあるが仲間を増やしながら社会をよりよいものに変えていこう」と呼びかけました。



義基祐正さん(富山国際大学)を講師に迎えた全体講演

全体講演は「今、こどもの声を『きく』～学童保育と子どもの居場所～」と題して、富山国際大学子ども育成学部講師の義基祐正さんが講演しました。義基さんは「今の社会は何か『活』をしていなければならない社会。就活、婚活、終活など、活動的、競争的になり生きることが困難になっている」と指摘。「条約や法律で子どもの意見表明や社会参加が権利として保障されているが、実際にどうすれば子どもの声をきいていけるのか。その意味を考えたい」と提起しました。「聞く」とは言葉通りに受け止めること、「聴く」は言葉の裏にある意味(心)に触れること—という東畑開人さんの言葉を紹介。「しっかり『聞く』からこそ、『聴く』が深まる」と解説し、「私たちの社会は声が『きける』社会になっているだろうか。」と投げかけました。その上で「学童保育では生きることが大切にする営みを大切にしてほしい。それが子どもの心の声を『きく』こと、心の底からの自己肯定感になっていく」と語りました。